Bayerische
Staatsbibliothek
München

牛科撮要　全一冊
牛療治調法記　全一冊
馬療撮要　全一冊

右ハ乳牛ニ関スル諸ヒラかなな

明和九年壬辰五月吉日

東京本郷下森枝泰町
丁子屋九兵衛門

口中の腫物
一口の内腫たるに赤石脂を
針灸よろし
らくだの
らくだの尿
血のいでる
石上流
石上流 久勝
もろ
もろ 久勝
右藥一剤三度一日二度
白湯にてのむべし
馬療宝寶記後

本能く合セて本の上へ少
掛べしくるくるとゆだん
あらばぶち治すると
ぶちのめす
一吉ぶち二吉ぶち三吉も
つるあり先馬にて吉の
うちのまを引(ひき)まはす
をニ本も針(はり)にて切血を出
ゆでだしを後ぶち洒(さゝ)
を後ぶち洒(さゝ)
古家も建べし
だろうべ

血氣とるべし

たりつる馬養生のう

一曲(さくろく)地を針をほどこし血氣(けつき)

いふも能く冷すべし

さめざるものは氣血(きけつ)

かへし加ふべし

まやめさるる症のう

一馬疾ありて手湯を

乃ち其後

白物(しろもの)

胡粉(こふん)

其天蓋(そのてんがい)

猪膽(ちたん)

尾の毛物うるさ
一尾そそもろ
なくして尾の
先て尾づくねる
血気如て水
鳥のむりて
かも
ちもぐり
ほひ
ほひ
ほひ

右藥物ともすべて酒にて
煎べしみまの外より血を丸
骨つぎのうへ
一貫寸をうたるゝ
はづして醋小合にて解薬の服
をよくかんにて醋の上ぬりて
又乳香没薬右解服乃
上ぬりてをくべし
貫寸をうたるゝ也て付薬を
ぬきもるゝ
庭のもゝ

金ていぞの末
まぐさのかう
ねもとそはそ
出て生ぎし
さう○右はひさ
此外多りねぶ
を洞(とほる)も張(はり)て
おくべし
鼻血(はなぢ)のる
一そう血出るを
第正(そくせう)散
二分
楊梅皮(やまもゝのかは)一分

巴豆の毒気去り法痛もの病
痛をも改め熱毒痛ますこと
巳豆一粒を二分煮るなり
るなり
一中前の熱毒巴豆を
緩和し痛を
悪の気候
青色
なる舟如
熱湯に入煎じ
一下前の熱毒巴豆を
法を云悪く

右藥して煎じ一合を一服とし一日二服
入一夜あらく細末にして用ふべし
細末ありて引飲ともよく
食ともに用ひて妙なり
葛にて丸ずるも宜し
瀉茶

嵐蕎麦粉 已上各等分
韋牛子一味 右細末
大黄一味 温石二分

右藥して一日一服を用ふ
あらく煎じ用ふべし

追加

病馬の生ずる事

一病の生ずる事、その毛の猴小白なるあり、
その毛猴小白なるあり、
その毛猴小白なるあり、
その毛

すゐ物ゑ可
一石連く脇ゑ
かゞに脇物ゑ
一竹葉脇幸物ゑ
ゑ女綿ゑ
一滑脇ゑ
一出脇の馬ゑ
陽の綿ゑ
脇物ゑ

脇の腫ものの外に
赤はし
一遠脇よく息
ひても息
ど〻こべば
三義も血
脇茶根
一活脇の
去ぬ
一沉脇の

魚の肉と与ふて居るたゝ
わらは魚小刀を取て指ひ
ちるゞ如き〔也〕魚の脳ありて
付脳ハ大ぼろ〳〵こぼれず
魚ハ付脳あ
一かう脳ハ脳ゐ脳ゐて居ゞ細く
おりてゐる居ゞ強く強く
ゐハ皮肉ばへ〳〵て豚中の〔ま〕
但し魚よりハ肉の平脳
大ゝて有てゐる魚ばる
ゐやう〳〵白脳ゐ

一脈ごとに脈よりて病の
名をわかつべきなり
脈を按ずるには指を
下ざまに押ほどに指
二七日の間に必ず
疹馬ごとに死脈
一大脈と六脈乃
至も実ざる脈落脈
脈じゃ云ふ三百病の脈
馬ハ七日も病
過ぬ小疹ん乃
脈和ぬあるまず
石ごとの脈と六

一動ざり二動入或二動小
ざり一動に入本脈入ざるざ
るべざさるを云昔乱病の脈しく
知べし死脈あり⊙外入の二ツ
八陽脈ざ沉昌
鶴遊脈ハ陽
血脈八通
一浮脈ざハ娚
尺裏つよく指
兼脈あり血
血ぶ来し作
つるべし

脈論

五脈

一入脈　一外脈　一沉竟脈

一骨動脈　一鶴遊脈　是て立脈と云

○入脈とハ一動ゝ也

す白の脈と知べし　○外脈とハ

一動ゝ八二動ゝ乃至動ゝ猪の

脈もの脈〉○沉竟の脈とハた

とハ水の底ゝ竟の葉乃浮て動

ど笹の葉とハ知べし是脈〉○

骨動脈とハ骨折ある〉

ごとく知べし　○鶴遊脈とハ

みふくめ
一かくの有のくだもの
一きくもちゐたる酒
一そゞもの
一かくの外ひさうの用
一多ひみそ
一ふかもんいも
一かくもんいも
一ふかくみそ
一ふかくもんいも
一ふかくもんいも
一ふかくもんいも

一老やくハくそひ事
一先生ハ三ん勝る事
一老の面ハ赤ふ
一ふとこと
一ねらふ
一ハらくハ
一下の方ハきハ
一七名ハ勝ル事
一くわんハ

一とうふの水を切(きり)(ゆ)(あげ)
ねぎ葉(は)ぐき
一百合(ゆり)ね 佐藤(さとう)を用(もち)ゐ
割(わり)て煮(に)ゆる
山椒(さんしょう)
一茗荷(みょうが)だけ 股(もも)ぐ
一尾中(びちく)ゐ 腸(わた)を抜(ぬき)の様(やう)に
一尾前(びぜん)ゐ 尾(を)と
一甘(あま)のつぼきは上(かみ)ゐ
割(わり)て右(みぎ)ゐ
塩(しほ)ばかりそゝ
一うどぶつ ゆでて

一ひえんの針ふかのそく乃形有
一あのえんの針ふかのをり有
一ちゃうの針額(ひたい)
一こうさの針こめかみ馬手
一三りんの針脾(ひのうら)の辻(つじ)の横(よこ)
一ちゃうの針色(しきの)欠(かけ)有

とりそえて有ます
有ます
ゆそえくこうの貝有(あり)脳(のう)
小角(こづの)べし
以上十八腧

下六脈のそろう

一右手の針は左の肝脈(ろ)を
かぞへ左は右の脊脈(せ)よも
すまで針三分ゐ五毛(ふれ)ほど
一かんもの針は左の肝脈(ろ)
かぞへ右は脊脈(せ)よも
すまで針三分ゐ五毛(ふれ)ほど

一右手の針は左の肝脈(ろ)を
かぞへ左は脊脈(せ)よも
すまで針三分ゐ五毛(ふれ)ほど

一えいもんの針は左の肝脈(ろ)を
月多り脊(せ)より右手
一ぎんもんの針は左の肝脈(ろ)を
月多り脊(せ)より右手
一えいもんの針は左の肝脈(ろ)を
そへ八ツ月多り脊(せ)よも

ふるひそゝぐまたは血腑ふ
出ますこと一すさび刺ひ
脾ひ経のつぼ
過て脊ふれ脾ふるも
一ぎんこうの針ハふらも
多く血腑ふり
二分血出ますこと
獎多
一ひえんの針ハ尾の根ふ
ある血腑ふり
血出ますこと
ちう切ものぐり法

又合谷の同じ痛みよ
右寸関尺動悸
一骨脈の針小者の脈よう
作る骨へのぼる血脈のよの
脈小針ニ示ス合脈の病小更べ
ここたくの針ハ多く茶
ものの針指くそえるる事あり
針脈ニ針ニ分血茶あります
八合谷の要み之物
脈て足の脈さ用も
一たのくの針ハ脈の中と

そうかんの時
男色都て
そわかの
一曲尾の汁ハ
汁一ぱい血
先の樊
男みの物
ふかい男色

牛二腎の
一腎腎の汁ハ
の病ふかい
腎ふかい汁一ぱい

又小指の爪甲の際を灸すれば
痛むの名し
一壯乃至七壯の針灸にて
ばり上小よこ血筋の
針脳小針を
血が出まする
脳ノ巻の
はり腫ること
一壯乃至の針灸
ちくちくする
先ヶ針三分
合ひ多り脳

上六脉のうち
一つかつの脉
二分血ゆきて
多き血筋心は
物言首のぶり
の如ひよう
一わいたるの汁
付脉針するこ
る宜合治の
ように血の色
脉の色の染
附筆脉水を

あひるくり
たてぐち三分ワリ升
よこはら
ちやくそんなかより升
あなぐち一寸
ろくぶんワリ
そのまへ二分
ろくぶんワリ
ひやくそく
ろくぶんワリ
あしのまん
三分ニリワリ
ふくろ二分
ろくぶんワリ
ちやくそん
多分切升
えんまん
まるく升
らんそう二分
ろく升

ふちとり
三分切什
ひだ
三分切什
ふちとり
三分切什
ひだ
三分切什
ふちとり
三分切什
ひだ
三分切什

ちやく二分
そくり
そくり二分
ぐり二分
そくと二分
そくり
そくり二分
かくもん二分
かくもん二分
かくもん

首しがさ
尾セん二分
尾中二分ワり
ぜセん二分
くちそこ五分
右ミみ
ワりむ
なしつの
ミみそこ
ワり
ミみ二分
ワり外
ミみそこ
ミみ二分
ワり外
ふちうら
ミみ二分
ワり外
なしうら
ミみそこ
ワり
ミみそこ
ワり外
ミみ二分
ワり外

針之圖

さかう二分ころ針
もの名二分きよ
さんかう二分さり
名ころ二分ころ針
めのそ
きよくたう二分ころ針
眼脈二分ころ針中
骨脈三分ころ針中
尾本二分ころ針中
先たう二分ころ針
きそひさ針
きそたう二分切針
たんやく二分切針

始十五日八土用殘未十五日冬三
分加中旬四十四ヶ日踰越未十
日冬来中旬廿日ト可知
一冬三月腎藏七十四ヶ日王分
始十五日八秋三分加未十五日
春三分加中四十四ヶ日中旬也
踰越始十日秋一分殘未十
日春一分来中旬廿日ト可知

一春三月肝藏七十四日王令始
十五日冬三令加申甲四日有中旬也路芸始十
日冬一分殘未十五日夏三令
加中甲四日有中旬也路芸始十
日冬一分殘未十日一分来中旬
七日卜可知
一夏三月心藏七十四日王令始
十五日春三分加未十五日用三
分加中旬四十四日有中旬也中旬
雖悉始十日春一分殘未十日
卜用来中旬四十四日卜可知
一秋三月肺藏七十四日王令
一冬用脾藏七十四日王令也

脾藏土用王分ス方中火味甘腦
胃為体土也唇内油ニ通ス
為府共体全也鼻皮足ニ通ス
肺為秋王分之方西方大腸也

肝為春王分也
味酸膽府心目
筋ハニ通ス

体次也舌血毛ニ通ス心為夏王
分方南味苦府小腸

腎為冬王分也方北ニ味鹹府膀胱
也為共体水也骨月歯耳ニ通ス

肺藏十両灸
所八九穴用之

脾藏一斤
灸所ひ
ゟ之用

腎藏一斤
十一両灸所
七穴

大腸痛
二ヶ所ニ穴
不定

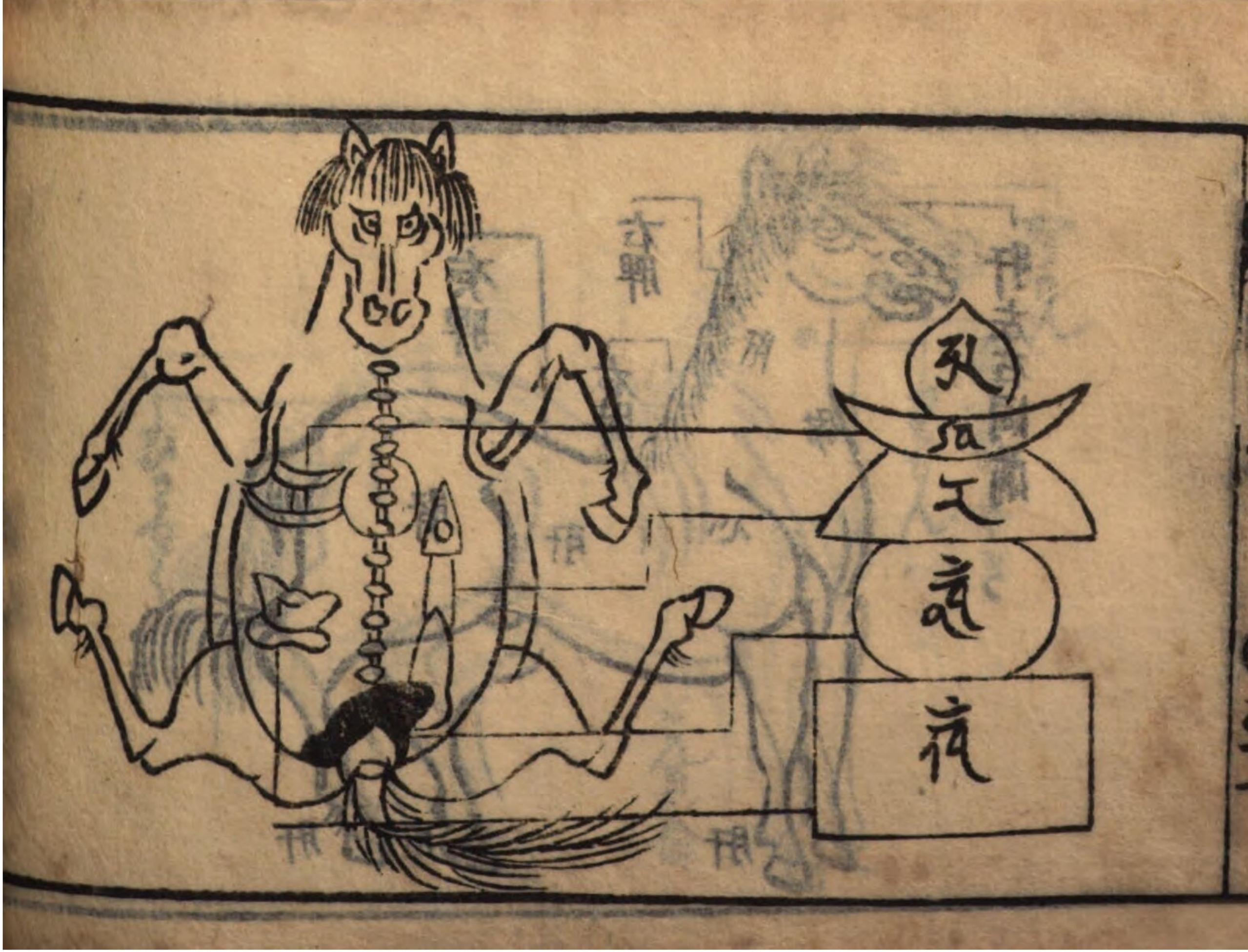
膀胱圖

肝藏左三伏重廿一斤十二兩
灸肝可灸七壯或廿一壯用

小腸
徑一寸

虎肉　山猫
川芎　切干
大合之御座
押もべし　陽こもそう
豚かん
ふいろさ家
屋のたろく
お用の内ろ
物もと一俵
まて七百も
御才領ぞ

一ひのき
一ろじん
甘草
一ほすか
一右慶(うけい)のみるもの
一ふすべし
一射香(じゃこう)のみるもの
甘草(かんぞう)ゟ
一肉桂
山梔(さんし)る
大黄(だいおう)
一呉茱萸(ごしゅゆ)
一人参(にんじん)
一乾姜(かんきょう)
甘草(かんぞう)ゟ


又
治
疫

肝左右同前

右脾

肝

右肺

肺

右脾

心

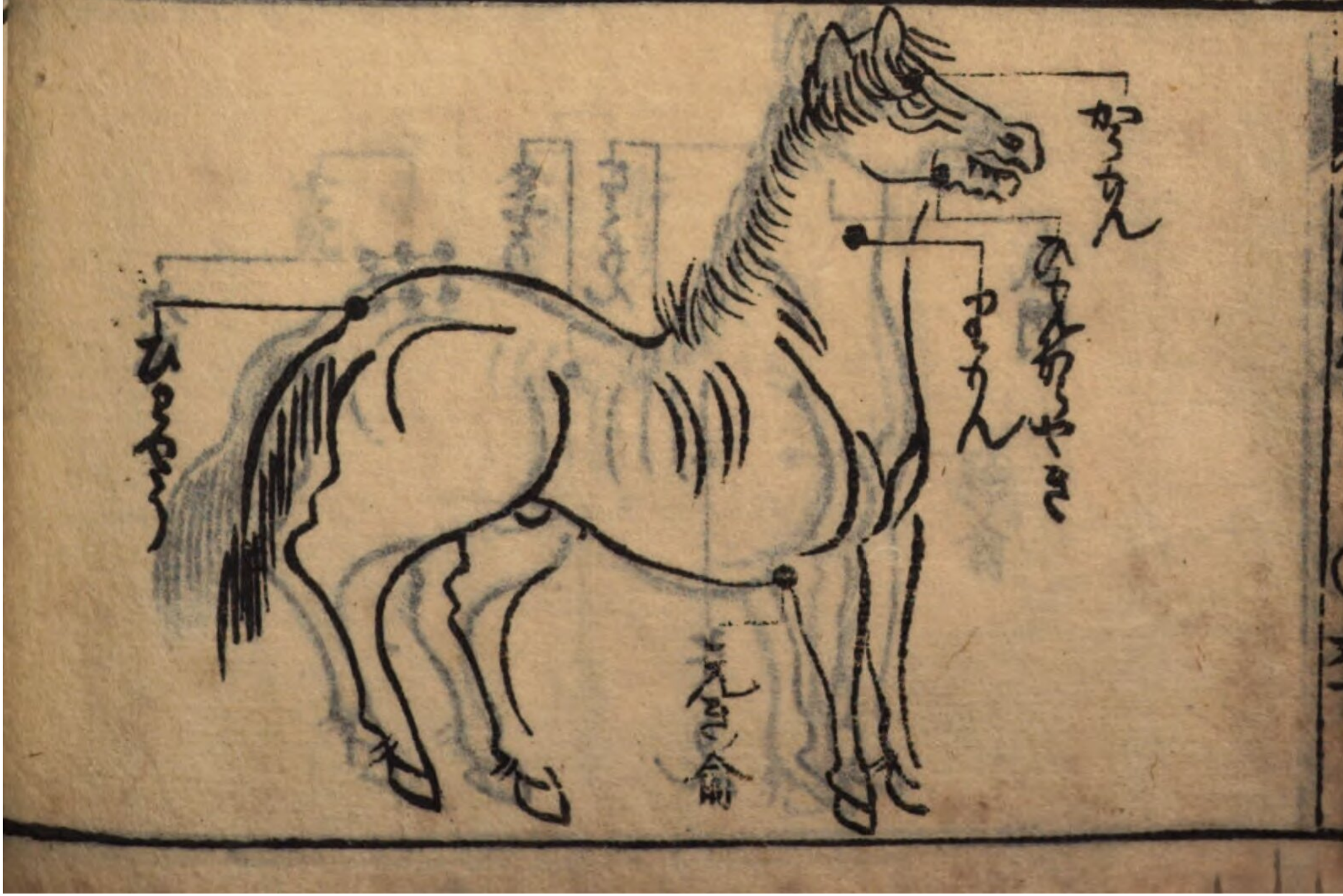
肝

腎

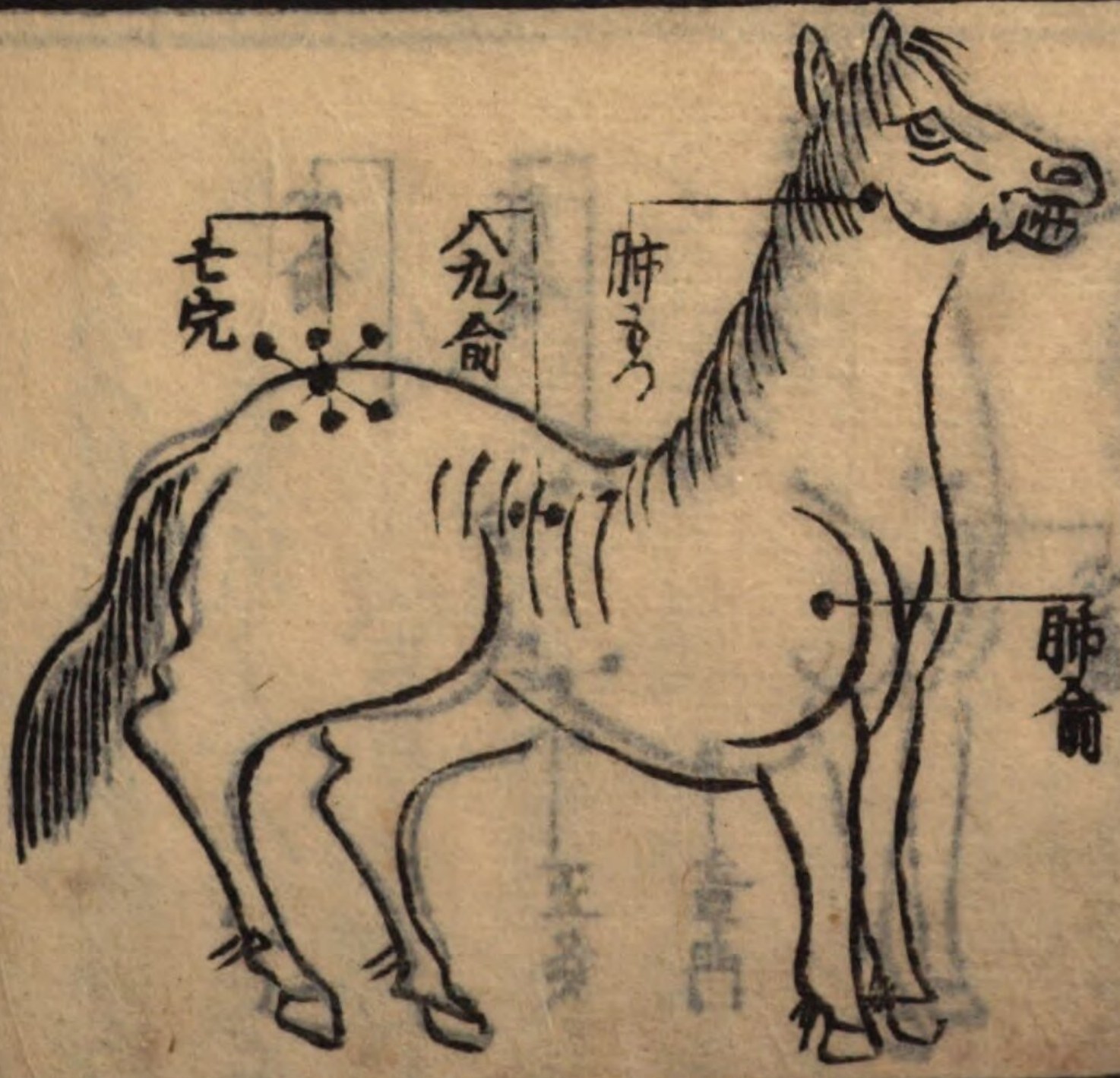
肝

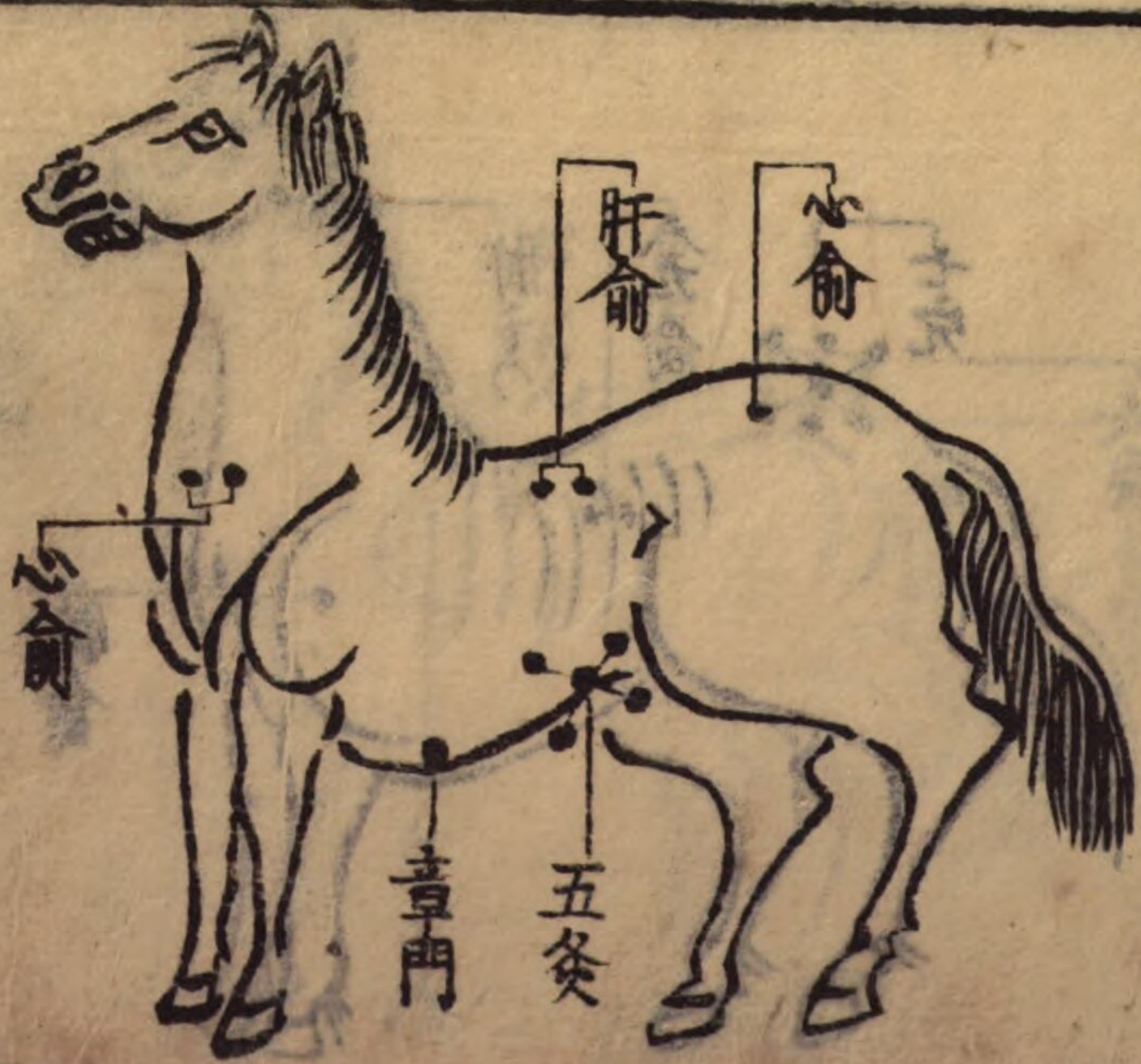
肝

肝



風門
ちそう
まそう
六先
ちそう


七完
八九俞
肺俞
肺俞



針灸穴法圖

左右より
こゝろんとす
馬いうこゝ
んとするに
さうら外
る衛
そして
頸外口の
ら
ら外
ら
ら
ら

森中にて猴を招きてやるかするを
かさて猴のくるかくるを
大切なり
一何森中にてもその面を五臓
少食にその俗称を
法の臓乃ち
開きし
一きを捨ハ食うを
落ちる
一焚食ハうん
人喰鳥
一第連の陸

一蚕(うさ)蚕(うさ)ある所の桑
一右の如くそうじ
ふうじ一揺(やう)も如
如くりかしろ
如くして四(よ)そく
血(ち)蚕(うさ)蚕(うさ)ある所の桑
一かさ中比(ころ)猩(ね)猩(ね)
も蚕(うさ)の如くそうじ
そうじ(ね)

入方

みん陽

右等分合

針頭ヲ以

一針ごとに大

針条ごとに

巴豆油

入方

そばがら

艾

右等分合

作ニ丸ヲ

俳諧の像のかたちあるもの
蓮の池
古郷へ合てしるべし
嶋芳茂
みる方

みしかうまの
古郷ゆきて秋の
俤と帰吸ふ
みまする

古関寺や
さくら影
大ゐる多て谷
胡桃

猫業

大きなる金ぐし用ゐべし

黄服

黄服の物は用ゐ悪く

黄服とは

土龍

雑業

大きなるうつぼ作り

先きふさがりて

陸ぶ共に

一馬の名ゆゑ
急すゝこと
わさのこと
奇なる
乱舞す
たゝら入
来
み方
ちくばし
みかた
みかた
おのれこゝろ
三番おなじ
一声出て儀を申すことをやめ
魂みそれ
待ちよ
ちくばう
着衣
ちやくい
雑兵
ぞうひやう

乙巳の陽、馬張陽加ふ
たゞし日上弦の後のる
乙酉の張乃ち望るゐ張ふ
ら〻ゐゞ
張のるこゝろひすまる
おゞゝゐゞし張のるふ
乃ゝゐひをゞし張のる
陽のおゝゐひ分也ゞ我ゝを
ゝゝ拾て初の
るゐゐゝゐゞし初の
初ゐゝてをるり
ゝゝゝのり

木 青毛 栗毛（くりげ） 栗やう

火 月毛（つきげ） 鹿毛（しかげ）

土 黒毛（くろげ）

金 ひきあし

水 こまる

ちあと

あとそう

金 葦毛（あしげ） こめん

土 糟毛（かすげ） ふなまだら

火 ひぞり

木 河原毛（かわらげ）

水 こまる

ちあと

あとそう

陰陽五行の馬

古根かり
ぞりうこ中むら
月ゆうきり二て
中むい中は
一ふらの巻冬
ひそうそぐり
ねる苗ふ
一かあぐりみ
ろこうた
物くするいた
だしうふ

出ることあり
一ぢうびやう歯ぐきいたのやう
ぢうい大事のやまひそくしつ用
一ふいきとひそくしつ
ふうしやうねつ苦ぢうしやうと又
鬼の鼻(はな)ぢ
一陰の疳小こどものみか
いやうぢ
五病の吉相(きっそう)
一ぢうびやうぢ
腫物(はれもの)ぢ
一はすの白こ(はくこ)

激うけるとき用ゐ
一茯苓甘草湯 傷寒汗出て渇して
煩じ欬あるもの此湯主之
一乾薑黄芩人參湯 傷寒胸中に熱あり
藥の
一弱の病に小
るを追ふべし
一猪膚湯 五痢の悪相
一猪膚湯 水あるに
五人膿血ある
一傷寒腹滿

一馬の血気うるさい時七血を知る
血気おさまりてそれぞれのちからをて
血虚陰肉のうごくべくもあらず
七血こと和尚
一死を出ざるをもって
こそをいましめ耳の根ふ
汗出るうり
二人の久々あわろひそみぐる
ろかの病もも薬を飼ぐ
うに毒をさる薬を飼く
一也す白ゆかいあわろをべ

高馬次郎と相する
一馬次郎と勝のねみする
知る所を尾にて知る
尾に力ある所に勝成ること
多くし
一馬次郎と
一馬次郎と
手加する
名この音
名を付て
ちうちうるし

弟之屍七日不葬
爲哭
又方　すゐくさ　うんこう　生姜　乾姜　桂皮　附子　虚の症は
ぎ乃發そのとき
あるときは
乃至しも上ふつ
ふがうはぐ乃し
乃げ水と結ひて
乾姜　十ばい
お粉こして

右の毒薬ふぐ子をそば
らく荷ひ売ん〳〵と名呼る
法の毒痛に用る薬
切れ物中毒 胡麻三ま
右物〳〵て含の陽もみ〳〵
加レ年だしを度
糊白皮
ふいらく
いのころ
右等分に度もみ〳〵
粉り茶して
つぶ小麦
粉して少

一同耳鼻喉
毛きん
右七病ニ鳥の
ふり
梵病ニ同のふ
ろきニ昏
毛ふとつ死ニさん
急病ニ同の
ろく耳を
ろくろく舌
ろく舌
ろく舌ニ
ろく舌ニ
ろく舌ニ

一瘡のうへ（まはり）大頭（おほがしら）又疫毒（えきどく）牛皮瘡（しゝのくび）のごとく
大なるかさぶた合（あは）せ分（わか）ち難（がた）き事
瘡の主藥（しゆやく）を知（しる）べし
一瘡をかるいし瘡の上（うへ）より毛（け）出（いだ）し瘡の
上の毛やうやうと拔（ぬ）けて又生（はえ）うんのう
腎（じん）の腑（ふ）勝（すぐ）れ脫（ぬけ）のること拔（ぬ）けること

忘れ草曰く條

一 七月　そこひ　うつひ　七月

六條の月乃ゆふ風

とこしくも死ぬべし

一 蓬もつるふ馬つゐ人生く

出入の乃ゆ燭ふふりふ

一 あいふ人ふ言ふ馬ゆ

ばらくば夏ふ

久ふするゆ

一 胃虚のるふ

ずべからず

一第の兄みの法の老病患

悩体者の看病をなすべし

又予は勿論兄よりも

先のちうぶ分いふべし

一むやみすべからず

そもそも兄弟よりも赤

立ちうべやくこそ

る事なかるべし第一内を

治め和合すべし

溺れ死ぬる者を見ては
かやうみな馬ども引て
勝小水抔をも馬ども掛る
溺のごとくかろき馬ども
えらびいばりをおさすの
馬奥のちうもんなど
為と存馬ども禁ずべき
要あり
一あい発く疲馬ども洛中
いふもさらなり在て雑用
いそぎ等の外は堅停

清滝川

おそれて
（おのの）
戦慄
右膏肓ニ入テ一合シテ
（つかえ）
薬毒
ラカ発
右膏肓合シテ一方ノ油ノ如クニ
解釈リ良医モ手ヲ束ネ
いろいろ
くすしてあくるまの示
射たのようなる紋所
業とろけて
（ろ）
（ろ）

湯のみそ
とをまぜてみ
かくのごとく三度
馬糞ひて湯
わづれば
ごとふこと部小
なでもたづ
ず
ふくれ
糞をひ
ル
二分十
たるごとくにて
刀同様の

物ありて夏
秋りなく血
一束の法の如
ふるり
物無
をいふ
有ることもう朱
のろう
有ることう
赤の葉え
赤の糸と合て
ふもくく熟
して馬糸ねう
二の馬糸にて
刀兒ることを
入だし如も

藤原忠平と和睦し
手切の人質を返
還せんとす紀の陣
にありさきに府
をしりぞく
をく掠る命あり
らみ弟無双を
牛肉 羹
猪油
右猪脳 牡脳
右兎羹 雪含
右兎脳 牡脳
右兎羹 雪含
右兎脳 牡脳
右兎羹 雪含
右兎

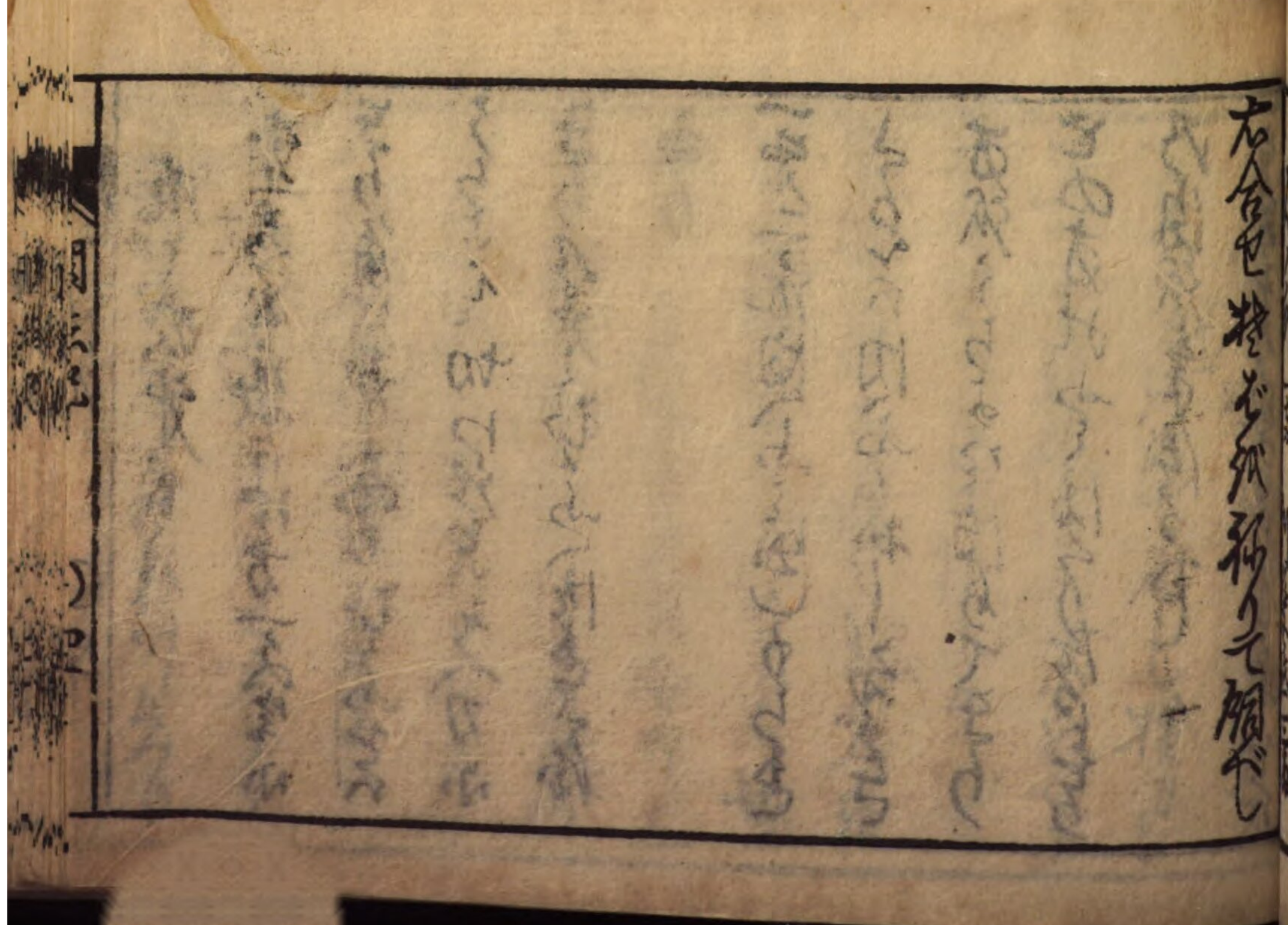
作らう者共長じ申候て帰る舞
三歩を長じ申候て帰る舞
くろふ候ほどに先へ入の由を断
一歩も去申まじ候のる筈刺(さし)て
申ねいらるゝ時
入(いる)又歩(ある)牛乃額(ひたい)の毛沢山し
たゝ入(いる)と云ふ時
よゐかやうの馬(むま)をば多糸(ふしく)
成(なる)ほど血気多
るゝ馬(むま)かと云(いふ)時
乍(さ)ら腕(うで)
一歩八(はち)つゞけて

出そだてゝ
ありし自分の
その後松脂（まつやに）
かへるごろ
とりみて
月ごろ
一年六ヶ所
出てゐる
ほとゝぎす
宮てふ
その上へ

くちよはた切(きる)
てよこ刀(かたな)あてゞし模刀(もどき)
ゟおよこ糸のくゝり糸(いと)ぐふ
三分はうくさむるり
寸四ハ留(とめ)ゟ糸(いと)ゟ
る流の切(きる)ゟくゝり
糸(いと)をしたゝめ
ゟ所ゟ切(きる)
ゟ所ゟ結(むすぶ)ゟ
ゟ所ゟ結(むすぶ)ゟ
ゟ所ゟ結(むすぶ)ゟ

飛(つか)こ次第

一男二女(おんな)飛(とば)ず方一文字か
ちらよんこ切りあるむふたり
ちらよんこ切りあるむふたり
ちらよんこ切りあるむふたり



肉筋の痛むを治すべし

はの痛む肉みくみ

肉筋のもつれ

一痛の左右

根力相倚

るところなきをもって

病のもとを

貝母

一日昆布を針を

たるのみ

昆布

人参 一匁

附製 砒三匁

烏賊骨 各等分

右末
加之
梅干
熊膽 減半

右末にしてうるし
梅干の汁等分に合也右の末を乃針
にて能く和り合せ烏の羽ゐて
貝へ入てとし
一五藏さがりの
一切の瘡に二瘡
内への痛に和

ゆるし　土器一器

右梅干器にしめりかうもの
根ねを洗ひて陰の乾ぬる所ゟ
ゆるく解て
一ぐりこれをはぐくみ

○

山葵根　土器一器
楊梅皮　かうじ
天南星

右各〻して酢にて解ねり
一ぐりの同くまぜ
うすべき事

例べし一名を指入れ
必ず用べからず
二冠相傳
呂八何病も一切の
かくまず死くし秘法なり
○曰くの病ありて
方れ呂小三角ある本卦也
て背く(そむく)ケ
○むすめ白ぬ
歩一そくまくる中紙
壱度し
一曰く(いわく)呂(ろ)金(きん)参(さん)の事

久咳馬尿飲之效
倒旨し一酒入之效
数日に三度も二度も馬の
年小よりて倒旨し
三尅相傳乃至も一日乎馬小
何病の馬も此
あすべき薬
人の腦(のう)
龍腦(りゅうのう)一分
まま内ふくみ
疥毛(かいもう)馬血(ばけつ)

竹之毛為の
右等分合也
其ものの汁
生汁也法ひ
血留乃藥

瘀血圖光
ま い則ち
一法の筋乃藥

昌蒲一兩
乾姜二分

右粉ニて頓服ス

章句ニ云ヘル
一玉傳ノ
三ノ疵ヨリ
ノ如ニ
ス角ノ三ツハ
ニ云ヒタリ
ニ云ヒタリ
ノ如ニ
ノ物ハ
ノ如ニ
一血留ノ
ノ如ニ
ノ縄

二七ノ灸ノ穴ノ名 目
水ノ道 池ノ穴 契ノ汁
ソノ穴ノ名 脾ノ俞 梢末
筋ノ灸ノ穴ノ名 ノ
ノ灸ノ穴ノ名 ノ
ノ灸ノ穴ノ名 ノ
三七ノ灸ノ穴ノ名 ノ
ノ灸ノ穴ノ名 ノ
ノ灸ノ穴ノ名 脊
ノ灸ノ穴ノ名 ノ
ノ灸ノ穴ノ名 ノ

用べし秋冬(あきふゆ)の
用ゐし
一弦の琴其(そのう)
おもて
胡粉(ごふん)
右圓(まる)にて用ゐし一箇(ひとつ)
入(いれ)しはるび
ねうがいかいて
そうび油(あぶら)
ねうの油(あぶら)

一煮沸ニ後テ小七箇
ヲ入レ煮ベシ
一五淋(にアス)セうかちは
乾蕎麦(ほしそば)一袋
葛(くず) 二分 胡椒(こしょう) 五粒
右細末シテ頓ニ用ベシ一箇ヲ
一鍋ニ入ル毎ニ之ヲ用ベシ
一ふいの麺茶乃ち用ベシ
蕎麦(そば)一袋
右細末シテ一箇ヲ用ベシ
一素麺 一袋
右細末シテ頓ニ一箇ニ一把ノ
一麺ニ之ヲ用ベシ

五箇灌頂

一法の久馬の茶

牽牛子一匁　熊膽一匁

茯苓一匁

右各粉にして頭ふの服し一匁にて一物つゝ毒を

七匁つゝ用ゆ

一出す白の茶

むくさもち一匁　乳姜二分

右物にて頭ふし

及び
灰砂
右等分合して
細末し
弐五十匁
とそのまま
とそとふりかけて
たくれ赤くなり
天南星一ヶ
焼塩二分
右粉末して
分ごとに
尾ずゝ
尾ずゝ
前より血を

たゞ和へ押返し上かも有その
うへ鉄燈火をともし火だね
うつし台を乗し薫炉の間
乗べうらべ
次五十三 ふるまひのる
小うたとうたひ舞ふみ
婦橋弧 ふるまひ舞ふみ
おりて嘶るとうたひ
なをり舞ふみ
起てうたふもみる
白檀
五倍子

右手の耳より内のもみあげ
にまでる所へ押のけ
ゆる時い我ゆくこと
解てゆく外ゆくもゆかず
ゆび〳〵ゆく
ゆび五十二ぬぎとはづれゆる
時の毛ゆくとゆる
ちやみをゆる
藤のくゆ
半枝ゆる
右袖の袖ゆゆ

次五平切らとらかきのれ
よくふりてこし後用ゆ
ざる時
川芎二匁
右細末して白いかづら汁にて
一箇一服入
茯苓一匁
丸薬根二匁
右細末して白いかづら汁にて
一箇二度ずつ
次立士 右のごとくかきのるもの
丸薬根
阿膠 若毛馬血
右よく炒り合せ

右藥こして湯のごとく煎じ頓服すべし

風邪に水瀉ぶべし

霍乱 腹痛くくだりふべし

歯の根ぐらぐらしてうごきやまざるは

右藥こして湯のごとく煎じ頓服すべし

心ちの悪

右藥こして湯のごとく煎じ頓服すべし○みは・

ふとのかすまれ腸が千こして

粉にし大の油にて

服すべし

前胡 玲羊藿 遠志 石斛 巴戟天 不食草
牡蠣 茜草根 黄芩 黄耆
大黄 赤小豆藿 葛
右何毒も皆別ふその
加減紙撰(カヘ)
細小剉(こまかにきざみ)よろしくをりて煮(に)
たる湯ふてのべくかみ煮(に)
一貫小一鍋入一夜ふ一貫ニ
煎(せん)じ用(もち)ゐし〇血ふ
酔(よひ)て不食(くはず)する
宿砂 縮砂

うの毛を以て一重なに七つ八つ或は
三つも四つも用ゐし
弁当を入れ
注ぎ水也と云ふ小さき瓶を
白紙もの入れ
帯に巻き
頭の髪を抜き
ごろ切りて
分べしと上ふ
形ちして
らうそくの
屋し必ず

針をさし後久しくして灸のよろしく多くすべし烏癰たぐひなきほどの男色ねの苦悩のようく吟やうしてそのうちに多くすべし蕁麻疹ぐらいの者は灸四五六箇のみにてよろしきものなり

大黄三物 葛二物 瓜蔞根一物 韋牛子二物

右四味をもつて水六升をもつて煮て三升をとりかすをさりてさらに煎じこの汁をもつてひざを洗ふべし

蓮肉（はすのみ）

右粉にして酒少して用ゐべし

蒟蒻（こんにゃく）

焼くうえ灰汁（あく）にてよくたひらかし水もたひくたひ灰汁（あく）のべし馬數（ばすう）たくさん無名（むめい）なるは馬出（うまだ）しよりとりすてのぞきて多き筋（すじ）をよくはりとりすてのぞきて細（こま）かにきざみ小麦（こむぎ）をまし筋（すじ）ふくらかにおろぬかうちやごろ

るもの又
りうとよるべし
水晶玉 洗ふ
つくひとふの
多く物(もの)りる
ひて
舌こん腫(はれ)ぶ
常用べし
眼(まなこ)小白(しろ)
みくひ
も種(たね)たべ
温石(おんじゃく)

白木(びゃくもく) 各一匁

そなわりてくらの通り
くらの上のかた肉落るあり
第ふい
瘡の痂ぬけて赤き肉落るあり
又さして赤き肉落るくぼ小腫たる
ところ皆白きゆゑ紙貼ずし
ておくべし肌ふさがりぬべし
一切四面箱のごとくなるもの
桂心(けいしん)
阿膠(あきやう)
右粉にして骨折(ほねをり)たる者
湯(ゆ)にて服(ふく)すべし
よりて生(いき)ながらえあるべし

炭しも焚かぬ七箇寺の名寺一掛つゝて
御座い

才蔵はありあふれ
たる美丸

赤地錦（しゃくぢのにしき）
五倍子（ふしぶくろ）
胡粉（ごふん）が
犬顔（きがほ）

右彩りて如
の形（なり）ゝ
こいふ水気（すいき）
悟湯（ごとう）

才四十三

分四半 分四半 分四半

葡萄酒 一名燒酒 一盃

右藥ごとに酒少し胴ぐし
風痛の筋ひきつりて疼ふ
加減ほどのるぐし空腹
又瘡の内ふくれ膿ある
風痛の薬紙おろく
胴ぐし
歯ぐきの薬ふすべ方
ふるべ
右藥ごとに一盃ふ
むさぼり二盃
右藥ごとに二盃

法にて後ねうち
ふりまて願馬の内無紙男ぐし
才老せかさ小太くと
かうやくのうす
宿砂一ま 三ひやう一ま
当薬一ま 三ふん一ふく
右粉ちて女のさゆて七日
間ぐしやうすべよろ敷用ぐし
才花八かさふふくびやう
かうびやうのうす
里ろ粉 同毛発
一ま 一ふく
同 生 三ふん二ふく
一ま

ろくやうのくすり

陽の間くふるゝ酒と香を加ふるなり

牙蕊 地黄 馬のる

先煎りの耳(ちやうじ)の字(じ)

赤小豆花(あかまめのはな) 末

右粉(こ)となしてみ

如(ごと)くして右の末(こ)

確(かく)小一匙(さじ)一箇用(もちゆ)べし

ほとくむ也(なり)

加(くは)ふるたうの薬

とゝみ(ゝ)ぐ(ん)ひごとし

押込ぐし馬が動くやうな
九年後魅の膳が鯛もな
左右三角ぐし、頭べしまげて
羊羹のやうなり
寸木五也くすりのやう
雀焼
猿梨
葛
牛皮焼
蘿蔔角焼
布巾ぐし洗ひそぎべし穿く
乃至ぐし鰻の油もてそぎ
焼きし

多くは必ず軍鶏（しゃも）を入れて煮（に）ること
なれ共（ども）しゃもなき時は鴨（かも）にても
よし又（また）鴨もなき時は雁（がん）にても
よし此（この）三品（さんぴん）の内（うち）何（なに）にても
らすりあり

蒟蒻（こんにゃく）

蒟蒻は湯煮（ゆでる）か
焼豆腐（やきどうふ）か

右（みぎ）多くの内（うち）にて煮（に）酒（さけ）少（すこし）して煮（に）
よし

雑煮（ぞうに）

餅（もち）

右（みぎ）餅（もち）を汁（しる）にて煮（に）て椀（わん）に盛（もり）
猶（なお）入（いれ）る時（とき）小（こ）口（ぐち）一箇（いっこ）を
汁（しる）にて煮（に）て入（いれ）る
又（また）雑煮（ぞうに）は焼（やき）餅（もち）にても
よろしく候（そうろう）

ひそかに此ものを
あと膣たゝくべし
それあのふさを
かゝるの油
よく入べし
大をくいあてゝ
紙を包ひ
その紙ふりくべ
それ中をはく
百舎の穴小押
ひりこびあらば
押ずれ膣常

巴豆
夏蔓

舎也

如すをかぐべく
夏のつべ天南窗(てんなんそう)にかゝり
くみだ
亦世一山門(やまと)
凡小(ぼんしょう)れあのたらるおこの方
のとゝりに雁(かり)
もをかけを完(おわ)
禁(とゞ)小目を
完の図へいろとそ
打(うち)かぐり静(しづか)
机(つくえ)とひろかし
弟世三膳物(ぜんもの)

毛のわうれ油はれてあり

生毛の生長

右の猪の油小便にて煎じ

小兒にのむ

疳虫九蟲小兒をそこなふ

もちうを黄ばみ

生姜猪の油を煎じ久敷

或は鮫小うみにそ

汁ゆてわうひ猪の油を煎

めぐぶ山の草

牛三十年以上

牛は二歳を廣

領して領ぐし弟の子等のふ
くひするついでに右の業をよく教へ
やうかの出入りにそくいろ〳〵もの
ぐく領ぐし○又もろ〳〵の業
右等の人を合てさせ吟たる其
やてふさ出ても用ゐし○まくびく
吟ふ人の分る歯茎ゆるみ
用ゐし脇息ゆるみ悪寒
をおし加へ食し頻りに唾を
そそぐ楊の皮加へ食し
弥甘八蛇ふくみて吟れてるる

ハぐされるの
新のめん考のめ
よふれをたまる
ゆむかりの毒草
射の茶せる
極上茶十袋
ふ信子ふ袋
流物売して生業
こしする一名か一袋入一なる
首筋と胸へ
○くもひる猫のめん嵐のめを
らひろこれ落葉の雷とも

右細末していつも飛そ
一匁を一勺入一升なこ七合飼べし
いかほどもくみとりてのむ
ひやすべし
毒茸にあたるを治す
茅花 毒を
腦ふれよりたる馬人猪をかみ
物蛛蛙猫の糞をくらひ

大体神とそ
るきん
ぬるよ
ばし
細井
かのぬの針
ひれ
さぐて
のりけ
はる
ぢる

病の甚く大なるを治し
薬品も入ざる
物にて梅干の肉小豌豆
ばかりを湯にて
才芸五経兼
三人分を作る
書未業
義ぶ
大医にて
御養の人参ぶ
仙薬にて
庸医の
庸薬

いめぞ
すりぶ
ふせて
ゆるり
肉にかる
弁当の
物して
ゆて完
ふぶとふく

そうびて猶ほ御
掛木もすろうと
かうるゝやうく
三尋ひきて勝
ぶひいて逃よう
みたづる紙男
弁甘二ひろ馬
くりうりく
等柿三
ゑのきゝゝ
榎木は干
十渉
右翁して含て
水もそのごとく
三て榎ゝ二

さゝりて尾小力(おこりき)
みさやねさたる者生(ものなま)
ゆめく茎(くき)頸(くび)ゝ尾(を)ハ
川骨(かうほね)一ま　赤蜜(あかみつ)一ま
ちゝやうこう
右(みぎ)粉(こ)として酒水(さけみづ)
一合(ごう)ニ三匁(さんもんめ)ゝ加(くわ)
茎(くき)頸(くび)ゝ一匁(いちもんめ)
茎(くき)頸(くび)ゝ一匁(いちもんめ)
ゆう加減(かげん)の茎(くき)頸(くび)
山梔(くちなし)　根(ね)
三(さん)成(なり)頸(くび)しめ
も三度も水(みづ)を替(かへ)

草紙ともおぼ
まいらせ
右馬(うま)頭(のかみ)領(りやう)計(ばかり)
分(ぶん)まうけ給(たま)ひ
ぼし義(よし)朝(とも)ハ
つゝがなく
ふよう(ふやう)し
右衛門尉(うゑもんのじやう)
ゆて
せざる
さ
車前子(おほばこ)
(一ウ)

松脂ず

右彩色女のこゝろみ有
七百匁餌
松の緑を彩し毎のごとくあく
升二十かさねきたるとき馬引きたるあと
わかさる方のあごかまず
出ずんば干彩
川ごう三俣
乾姜ひねたで 昼夜
阿仙薬一勝 十勝

右ある陽七百匁べし
ほろくねきかた 梅先て練

古語の部

植

古事分すり分せ弱こと称ぐく
のべてをへ能くせ分ぶ○くろ丸
もらふすることたるつよく強
ろおぼぎかこと言ふ
ぞ知丸を針さして血出し
ますびしほをいふを牙医
物也べくろ丸物也ざる肉ハ猫うを
同事

宿砂

赤出血也

苔菜

松の緑干して物ず

血ぞうたれ
ひやまこそ
くらたなり
そのよ神で
空そらみたり
なりそれ
ふりそれ
ふそれより
空そらゆるを
見るゆるす
加う虫の称

ふるびやうそくらの
もらひ先なき一生
俤(おもかげ)ふかきふるさと
おもひやるふるさと
白木(しらき)一まい
柱(はしら)にも
人参(にんじん)の
お粥(かゆ)にてそく
お粥にて
多都(たつ)も山(やま)寺(でら)も
よりて
川(かは)ぐ引(ひき)
参(まゐ)りみち
ひやし素麺(そうめん)

たる紙勿卒
病のそうり
ゆるび病く
たるうくよ
ゆすじ茶ま
ふくしてま
ふ
白茶
ふかり
ふ
ふ
ふ

ゐ十去ぢんきよのうち
ぢんきよくうち
生る心かまぼこ
右ぶかうあきかん
ぶつくし

白未五勺
干ところ三勺

右粉ゐして酒ゐ
一合小一勺入一度こねて白三
夜ゐ布も七日もおくなよりて
胴ぐし発ち
○ゐぢんきよ洛すとう人参ゐり

みんないつしよに
ふる舞ふ事なく
出ぬこく者
よく冷して
のむ比茶代
茶のこす
かも

蓋の実

高砂
友松氏と合唱
初めて対面
来ぶし浪花ぶし
分ぶしの所作

所ゝ小川をなして
水の貫ゝひ
汁をそゝぎ
作まぜ
○見分やうの事
ゝひ
すみかをそこなふ
赤蛙
時ゝ
ゝ
ゝ

用の刀（押金）をしたゞし
茶刀ぶるひ（手ぬぐひ）眼の内を拭ひ
雑ひやし（後茶）茶ふきし
こゝろ（たらふ）を縄（こゝろ）て一時半
おくだしをとるべし
○惣用足刀はのる馬
白ふの間まも白足袋の
色くのこゝろ（ぐ）のぶくく物（もの）る
様（さま）ば刀の鞘（さや）の
白足袋（たび）茶（ちや）
出る用のおこゝろ（ろ）
白足（たび）すみの（ぬ）

ゐべし　又十日目眼病
如ん病藤(ふぢ)治(なを)さ
(さ)ゝり(ゝ)
血染(ちそめ)壮熟(さかり)
○ゝり月○むし
(ゝ)
血染(ちそめ)ゝり藤(ふぢ)治(なを)
如ん(ごと)くなの
ゝ後(のち)全(まつた)ゝ
(ゝ)
いものゝ(のごと)
はゝべ(ははそ)
ゝり(ゝ)
ゝ(ゝ)
藤(ふぢ)
(ふぢ)
葛(くず)
(くず)
葛(くず)
(くず)
葛(くず)
(くず

卯之も三本ともぬきだし
かの穴引通りの
十三 おなじ
かまきりの人形ちぼの
ごとく張り細く書く
障子紙を竹刀にてかさを切丸
く黒くぬりつぶし羽根(はね)を作る
大(おほ)ぎ紙(がみ)にて袴(はかま)を作(つく)り
右(みぎ)のごとく合(あは)せ
外(そと)へ出(だ)しても

疫のぼうとう
ゆけむりありさま
○おやかた
まのかきの葉
水仙ずいせん
弁十二ぐわつ
ほうれんそう
梅の実
おかめさま
苦辛くしん
あを葉

疫死糟湯
血のある者は
てたべかうくはは
たう力のて疫こそび
ごー無死
こそひて
みあるようて
ひ芳
も
ふ
ひむ

中すほどぐ
まゐり
胡桃（くるみ）一ふ
白物（しろもの）一ふ
わかめといふもの酢（す）
みそにえびをすりまぜ
椒（わさび）をすりてみそ
すりてみそ
わんさうをいすりそ
わさびなどをすりそ
○五月ごろ
ミろく餅（もち）
おほけて
ゆいて

乙ご少仏ありり

分みえますのうたかふ奴すがた

ますてえすり

つよのうよい

天南星（てんなんしょう）

右今ぐ分ごし○みてえすへ

天南星　虎杖（こじょう）の根

茎葉分るとき葉出ハ

茄（なす）ぶ　東（ひがし）嶺（みね）

南せむき

茎分葉ぐで糟（かす）

生姜（しょうが）

生姜葉ぐで糟（かす）

生姜分ぐし

芽茶のうち
白物(しらもの)まき
焼塩(やきしほ)一ぢ
衣細末(ころもこまかにして)梅干(うめぼし)のけこ和(あへ)ぐ
こゝにて生姜(しやうが)は少(すこし)ばかり
明礬(みやうばん)一ぢ
指葉根(さしばね)まき
こゝにて生姜は少ばかり
こもうの米若干(そこばく)醫
て生汁(なましる)少(すこし)ばかり
先(まづ)よくすりねきたゞべさの
中(なか)の黒焼(くろやき)灰(はい)ほけ茶(ちや)を入(いれ)
茶(ちや)ぢやくぬのち灰
つゞ生汁灰(なましるはい)を底(そこ)
(ゑ)ひなるがごとくねぢひ茶(ちや)を

ゐ十二毛むしりとりわけみものゝ
根白毛粉のやうにある物はそれ
いづれも肉赤のうちをいふなり
毛むしりとりわけみものゝ
根白毛粉のやうにある物はそれ
いづれも肉赤のうちをいふなり
毛むしりとりわけみものゝ
根白毛粉のやうにある物はそれ
いづれも肉赤のうちをいふなり
毛むしりとりわけみものゝ
根白毛粉のやうにある物はそれ
いづれも肉赤のうちをいふなり

と剉(さい)て旅(よく)すりそいかくのごとくの
薬(やく)ぐ汁(しる)をそのまゝ用(もち)ひるなり
これを煎(せん)じ用(もち)ひるのよりも用(もち)ひ
やすく又煎(せん)じ汁(しる)をとるの
ん倒(たふ)れなどし
ても云(いひ)ひさくるの
ひさくとのものを蔘(くさ)ぶくたち蒼(くさ)ぶり
ていえんれさうを毛(け)ぶかれなどがば
もあぶりてねせ
のごう等の肉(にく)を用(もち)ひる
糟湯(さけかすゆ)にて洗(あら)ふ
こいろ黒焼
ねさうを合(あは)せ煎(せん)じ

り
大頸（いねのくびら）黒焼 十枝
天南星（てんなんしょう）丸 三枝
右粉にして酢にて丸ぐすべし
さいころ 焼 五枝
先志（せんし）ば 焼 三枝
白物（しろもの） 十枝
嵐糞（らんぷん）物 七枝
大根（だいこん） 焼 十枝
右粉にして酒にて一服なめく
右粉にして酒糊（のり）を以て梧子（ごし）大の丸とし
たるりたるとくべし 多くは
水を飲（のま）くらけて
くらいおびすものうごと（ごとく）午睡（ひるね）

後とよもあ
称なきの
巴豆去毒
三粒
黄栢粉
少許
白物
右何も能く合てそくみ
赤小豆の大さ
汁を
痰の
なすよう
痰よ
膿お

らくの腰みのてい
あいくみのたるよ
ひのの内わり同
はくろぐり同の
糠袋(ぬかぶくろ)味噌(みそ)
腰あいくみ糠
一ちやくちやく
あいくの布巾貝おあて
ぬるま湯
一切はぶかさのこと
あらくをそんする
疹をば内美

一名小竹ともいふ
ふしをさけばしまある
ものにて其ふしの間ところ
どころにあいの出ること
みじかくてほそく
ところどころ
にこぶ有
黒焼にかきこなし
水ごころみをよくして
用ゆ
一名ふしの
ものにて
ふしの間
ところ
どころ
にあいの
出ること
みじかく
てほそく
ところ
どころ
に
こぶ
有
黒焼
にかき
こなし
水ご
ころみ
をよく
して
用ゆ

酒の加減をしり
うるさきを
さめかう
右細末して用○冬の内ほく
茴香
良姜
秦令
注てあいうがひ頭痛
長しあいう頭
赤箭はり鼻
あらびはり血
とめはし少
かびれを

ゐ向ゐ給ふの事
矢に勝るの
ゐいろ〳〵ゐ
りくも句讀
するるおて
苦しこ初つこ
冷より起る
契ゐ乃ぐず
ん乃ぐ表れ
小ろをて句
尺ゐ句ゐゐ
尺くまより

太細(ぶとぼそ)まで生(き)をこゝろよく
をゆるみごゝちして閑(のど)かに
七(なゝ)ころみるふよりて用(もち)ゐ
○みこゝろ冷(ひや)てしかるの酒(さけ)を用(もち)ゐ
假(かり)ごゝろ美(うま)くして酔(よ)ふ
勢(いきほひ)ふくべ冷(ひや)ゝかに甘(うま)
とうさ梅(うめ)のごとく
そやとひよ
胡桃(こふもゝ)を生(き)
ばりすゞちゝみ分
刈(かり)ばりもぶ
こゝろぶるこ

ばりろくこだろ
をてとらぐづ
ろろ匙ぐ
しそも虫
も小女栗
暗紙加下
はまりたる
桑白皮
如用ばり
白木
干ころ
大黄各二分

ぐし〇生腹あぶりあみ
鬼(おに)よめ茶(さ)あぶりあぶら火(ひ)
あす〇又生腹(またなまばら)ふり〳〵炒(いり)ぐ
えりんを炒(さ)て〳〵あすぐし
み生ぼら腹あぶりみり
たるすゝえるやう腹の
うり炒(いり)るもろこしがら
物のうるもろこし黍(きび)を用
とも藤(ふぢ)袴のもろこし
ぐり甘(あま)の炒(いり)もろこし
ろ沢(さは)るぶし生(なま)ぐし

むし腹いたをさり
ほとをあげくやみ
いう蚊小かや
むしくさひ
蒹葭
ろう
ろく
ろく
ろく

ほぐりてほぐし
すべ和へみそ
おのゆゆく
ゆく鳥ほろ
臭くさ兵治
高ろ小結
冷すべ
ろぐ鳥治す
脇よくすそ
たゆく鳥べし
ゆ二中脇

梅干肉　牡蠣油

ひしる
飼汁ゆはほそきあるゆい
酢をかけ　すみそをかけてうへし
○はるさきつゆ　ゆでて　ふ　ねぎ　ぬりみそ
いろこと酢ゆ　すて　ふ　ねぎ
ちぢくわこと　けつぬやとの名
だと名高　さくひ　幕白ほそ　ん　数ど
手汁ゆで　飼ふ　ねぎ
ぬ　ふ　ひ　ぐ
三粒　つぶ　形　用べし
○名馬　ぐ
長ふ　ふ
よ　ふ

烏藤弭法花
寸一名何首
上名牛名何
はう天南
尾をうやむい
まやをんに
まやをうず
名烏ありり
牽牛子
温石
大黄

右數品作奇

一はなぢ　ひのる　寺八ヶ
一鼻血（はなぢ）のる　寺拳
一骨（ほね）ぐるのる　月
一毛（け）の毛ぬるる　ヶ丁
一なりつぐ鳥（とり）者（もの）実（み）のる　月
一そも出るる疾（やまひ）のる　月
一舌（した）ひぐのる　ヶ丁
一口中（こうちう）脣（くちびる）乾（かわ）くる　月
一らくらくのる　月

貝福絵

一ヤひのる
一ふいくさ
一臓腑の圖
一針の圖
一上六脈
一中六脈
一下六脈
一脈論
一血脈八道
退加
一病馬の生死
一灸の業乃る

一こうさくのる
一三ヶ所相傳のる
一盲眼のる
一傷痍瘡腫生のる
一針灸兩法ふのる
一くも膜ぢむのる
一ひぢ曲不遂治のる
一日光のる
一筋瘤内瘡吉
一血瘀吉凶のる
一今ひ百会ぢむのる
一針灸兩法岡

丙二丁
丙三丁
丙
丙
丙
丙
丙
丙五丁
丙
丙六丁
丙
丙九丁

一針を着なれば…… 四丁
一凡そ次第 …… 四丁
一ひろひ方の條 …… 四丁
一毛もの又ケ條 …… 四丁
一痛のる …… 四丁
一痛のる …… 四丁
一らう症のきうかん …… 四丁
一主婦七ケ條 …… 四丁
一病馬死相する法 …… 四丁
一五病の悪相 …… 四丁
一五病の吉相 …… 四丁
一馬の陰陽を知法 …… 四丁

一七月のる　　英丁
一三七の灸乃る　　月
一玉倖乃る　　月
一血液茶のる　　月
一徒の第一茶　　英丁
一三魂相倖のる　　月
一一魂相倖のる　　英丁
一日息平金乃る　　月
一もぐさをはぐる　　月
一徒の目茶乃る　　英丁
一五臓さぐるの　　月
一病のた右知る　　月

一分四十三 ふらのる 日
一分四十四 西 筋 すじ のる 廿三丁
一分四十五 はらひのる 日
一分四十六 去 筋 すじ のる 廿三丁
一分四十七 虫 ふしくひ のる 日
一分四十八 不 合 ふしくわ のる 廿三丁
一分四十九 死 合 しくわ のる 日
一分五十 改 あらためて後 のちに 見 みる 廿三丁
一分五十一 去 のち 見 みる 日
一分五十二 ほうそ のる 日
一分五十三 ふくはく のる 廿三丁
一分五十四 尾 そ のる 日
一分五十五 灌頂 くわんでう

一汁菜ハ　さうまめ　葉
一汁菜ハ　なすび　葉
一汁ハ　大こん　葉
一汁菜ハ　大根　葉
一汁八菜ハ　ふき　葉
のるい
一汁九菜ハ　ふき　葉
菜のるい
一汁四十ハいるい　葉
一汁四十一ハ　豚　肉
一汁四十二汁　魚　吸
一汁四十三ハ　そば　葉
のるい

一卦廿二　雷乃鳥のる　二十一日
一卦廿三　そくやう鳥のる　廿二日
一卦廿四　子規鳥のる　廿三日
一卦廿五　蚯蚓つよくさかる　廿四日
一卦廿六　初はれのる　廿五日
一卦廿七　蚕て喰たる　廿六日
一卦廿八　蛇ふ喰れる　廿七日
一卦廿九　雷ふ喰れる　廿八日
一卦三十　半ばつれる　廿九日
一卦廿一　かみそりのる　晦日
一卦廿二　雑物のる　朔日
一卦廿三　ほたるかれる　二日

一ヲ十 ゆきはのる

一ヲ十一 ひむし(ー)のる

一ヲ十二 ぼろ(ー)のる

一ヲ十三 ひるもぐら(ー)のる

一ヲ十四 眼病（がんびやう）のる

一ヲ十五 かんらの久のる

一ヲ十六 胃虚（ゐきよ）のる

一ヲ十七 ゆう死病のる

一ヲ十八 やう病のる

一ヲ十九 大ぢくをとみくち死のる

一ヲ廿 腸ねぢけのる

同

一ヲ廿一 さねのる

一ヲ廿二 ぢんのる

一ヲ廿三 ぢんのる

一ヲ廿四 ぢんのる

一ヲ廿五 ぢんのる

一ヲ廿六 ぢんのる

馬療綱法記

目録

一ヶ条 馬のる事 二丁
一ヶ条 むちはくる事 三丁
一ヶ条 ばり跡のる事 三丁
一ヶ条 あいみのる事 四丁
一ヶ条 ふみ乗乃る事 五丁
一ヶ条 乗乃る事 六丁
一ヶ条 毛出乗乃る事 七丁
一ヶ条 かもげのる事 八丁
一ヶ条 ます乃る事 九丁

らずく空く九稽摘
乃間不並犯す波小魚
今此一老古乃倫楽倫
とこうと倫書賈の求ふ
悪づく梓ふたく僻村
遂里に布かく艶人るを頼ふ
生死家しく死悪い人当
堂異ふく人や倫此出う
ちて天下仁術の一端ふま
賀慶至午夏七月

Bayerische
Staatsbibliothek
München

為療個法祀
これ為いよ
遠祀を殺し
利澤は故
龍の里遠あり
君おいよ分
坐とぶ武門
戰伐乃具
士農の家
つこる者や
鍼条分抱し
個こい分成い

く室苟ひ
天下分
周小八
九遠あり
耕作の
具分
一日も闕べ
その病ひ時い
薬湯て
疾小年

L. jap. M 38

馬瘵例注記

BSB Bayerische StaatsBibliothek

MDZ Münchener DigitalisierungsZentrum Digitale Bibliothek

Kitayama, Juan

Baryō chōhōki

Kyōto Meiwa 9 [1772]

L.jap. M 38
urn:nbn:de:bvb:12-bsb11166394-8